

タイトル

『ゴージャスお宝鑑定家〜う〜ん、ゴージャス〜』23』

登場人物

剛田 剛田質店の店主。ゴージャスな品物以外には目もくれない鑑定家。優雅で品がある言動が持ち味だが、クセが強すぎて周囲からは変人扱いされることも多い。彼の信条は『ゴージャスたるもの優雅たれ』。口癖は「ゴージャス！」。

白金 剛田質店の見習い鑑定士。常識人で、剛田の奇抜な価値観に毎回振り回される。神経質かつ心配性で、お宝を丁寧に扱うことに重きを置く。

持ち主 ムーンストーン製の泡だて器を持ち
込んだ若い女性。純粋な性格で、泡だて器に
思い入れがある。

その他の客(サブキャラ) 剛田質店を訪れる
一般客。ゴージャスではない品物を持ち込
み、剛田に一蹴される役回り。

あらすじ

ゴージャスな品物だけを扱う剛田質店。ある
日、店に持ち込まれたのは「ムーンストーン製
の泡だて器」。美しいが実用性の怪しいこの品
物を前に、剛田の鑑定が始まる。果たして剛
田の評価は？買取価格は？そして白金は
どれだけ振り回されるのか？

第一幕

シーン一：剛田質店の朝

（舞台中央に豪華な内装の質店。剛田が大きな椅子に座り、優雅に紅茶を飲んでいる。

白金はカウンターで帳簿を整理中。）

剛田（カップを優雅に持ちながら）「うん、ゴージャス！」

白金（帳簿を見ながら顔を上げる）「また始まりましたね、店主。」

剛田（微笑みながら）「朝の紅茶からして優雅であるべきだ。ゴージャスな空間に身を置く者の心得だよ、白金君。」

白金（ため息）「そうですね。で、今日はどんなお宝が舞い込むんでしょうかね。」

剛田（意味深に微笑む）「何であれ、ゴージャスでなければ鑑定する価値もない。君もそろそろこの真理を理解するといい。」

（店のドアがガラガラと開く音。若い女性（持ち主）が入ってくる。手に不思議な光を放つ泡だて器を持っている。）

持ち主 「あの、こちらで品物を鑑定していた
だけると聞いて…。」

剛田（立ち上がり、優雅に歩み寄る） 「ようこそ、剛田質店へ！その品、遠目からでもただ者ではないと分かりますぞ。」

白金（持ち主の手元を覗き込む） 「えっと、これは…泡だて器ですか？」

持ち主（頷く） 「はい、でも普通の泡だて器じゃないんです！ムーンストーンでできているんですよ。」

剛田（目を輝かせる） 「ムーンストーン！しかも泡だて器…。実に…ゴージャス！」

（剛田、白金を手招きして持ち主から品物を受け取る。）

第二幕

シーン2：鑑定開始

（剛田は泡だて器を大事そうに眺め、ルーペを取り出して鑑定を始める。）

剛田（深く頷きながら）「この輝き…柔らかな曲線美…。間違いなく一級品だ。」

白金（困惑）「いや、でも所詮泡だて器ですよね？実用性を考えるとちよつと…。」

剛田（キツと白金を見て）「白金君！この世に実用性だけで測れる価値などない！美しさ、儚さ、そして…夢。それがゴージャスの本質だ！」

白金（ため息）「でも、これで泡立てるたびに石が欠けそうじゃないですか？」

剛田 「そこだ！その危うさこそがゴージャス
…。普通ではない…。非凡な輝きがここにある
のだ！」

（剛田、品物を手に取り舞台中央で熱弁を
始める。）

剛田 「ムーンストーンは、希望と、直感の
象徴。この泡だて器でクリームを泡立てるた
びに、使用者の夢が掻き立てられるのだ。考
えたまえ、白金君！美しいクリームの渦が月
光のように輝く瞬間…。それこそ、ゴージャ
ス！」

白金 「いや、僕には全然想像できないですけ
ど。」

（剛田は泡だて器を手に取り、実際に使っ
てみることを決意。）

剛田 「論より証拠だ。白金君、ボウルと生
クリームを用意したまえ。」

（白金が戸惑いながらも用意する。剛田、優雅にホイップクリームを作り始める。泡立てるたびにムーンストーンの美しい光が輝く。）

剛田 「見たまえ、この光！そして、この滑らかな手応え！これがゴージャスの真髄だ！」

白金（呆然としながら）「でも、普通に泡だて器として使えてるのが逆にすごいです…。」

（完成したホイップクリームを二人で試食する。）

剛田（満足げに）「美味なり！やはり品格ある道具が作るものもまた品格を持つのだ。」

白金（驚きながら）「確かに…美味しい。」

シーン3：別の顧客の登場

（店に別の顧客がやってくる。彼は普通の壊れた時計を持ち込む。）

顧客 「この時計、鑑定してもらえますか？」

剛田（一目見て） 「この品、ゴージャスではない！ 当店にはふさわしくないのだ！」

顧客（困惑） 「で、でも…祖父が大切にしていた時計で…。」

剛田 「美しい思い出はプライスレス。だが、それを商品価値に置き換えるのは別次元の話だ。ゴージャスたるもの、超越せねばならん！」

白金（小声で） 「いや、もう少し優しく説明しても…。」

（顧客が去り、白金はため息をつく。）

白金 「こういうの、商売的にはどうなんですか…？」

剛田 「商売とは美を追求する冒険なのだよ、白金君！」

第三幕

シーン④ 価格発表

（剛田が計算用のノートを広げ、計算しながら独り言を言う。）

剛田 「ムーンストーンの市場価格、希少性、そしてこの唯一無二のデザイン…。総合的に見て…。」

剛田（持ち主に向き直る） 「この泡だて器、当店では…300万円で買取らせていただきます！」

持ち主（驚きながら） 「そ、そんなに高く!?!」

白金（目を丸くする） 「ちょっと待ってください! そんな高値つけたら店が赤字に…。」

剛田（静かに白金を制する）「白金君、赤字を恐れているのは真のゴージャスには到達できません。」

（持ち主は涙ぐみながらお礼を言い、泡だて器を置いて店を出ていく。）

白金（頭を抱える）「どうするんですか、これ…？」

剛田（満足げに泡だて器を眺めて）「美しさとは、時にリスクを伴うものだ。それがゴージャスの宿命さ。」

（白金は呆れつつも、少しだけ剛田の言葉に感化されたような表情を見せる。）

第三幕

シーンⅡ：エピローグ

（深夜。剛田質店は閉店し、店内は薄暗い。ムーンストーン製の泡だて器がスポットライト

を浴びて、きらめいている。その光を頼りに、

剛田がそっと泡だて器を手に取る。」

剛田（小声で）「静寂の中で感じるこの輝き
…。まさにゴージャスの極みだ。」

（剛田、生クリームのボウルを取り出し、泡だ
て器を優雅に動かし始める。泡だてる動作も
舞うように美しい。）

剛田 「美しさと実用性が融合する瞬間…こ
れぞ、至高のアート。」

（クリームが完璧に泡立ち、剛田がそれをス
プーンですくい、味見をする。）

剛田（恍惚の表情で）「この滑らかさ、この
甘さ…。やはりゴージャスな道具が生む成果
は、格別だ。」

（そのとき、後方から電気がカチツとつき、白
金が寝間着姿で現れる。）

白金（怒りを抑えながら）「店主！また勝手に使ってるんですか！？」

剛田（驚きながらもすぐに優雅に振る舞う）
「白金君、深夜は静けさと神秘の時間だ。このムーンストーンが最も輝く時を逃すわけにはいかんだろう？」

白金「いい加減にしてください！この前も言いましたよね？お宝を勝手に使ったら価値が下がるって！」

剛田（しれっと）「しかし、この泡立て器の真の価値は使われることで輝くのだよ。ほら、このクリームを食べてみたまえ。」

（白金は呆れながらも、差し出されたクリームをひと口すくって食べる。）

白金（驚きながら）「確かに…美味しい。けど！そんな問題じゃないんです！」

剛田（満足げに微笑む）「美味しさもまたゴ
ージャスの一部だ。白金君、これも鑑定士と
しての修行だと思って受け入れたまえ。」

白金（ため息）「修行どころか、店が赤字に
なるのが先ですよ…。ちゃんと寝てくださ
い。」

（白金、泡だて器を取り上げ、奥へ持っていこ
うとする。）

剛田（追いかけて）「待ってくれ！明日の朝
食用にもう一度だけ…！」

白金（振り返り、一喝）「ダメです！もう寝
てください！」

（剛田はしびしび手を引っ込め、ソファに座り
直す。白金が泡だて器を奥にしまう音が聞こ
える。）

（舞台が暗転し、剛田が小声で独り言をつぶ
やく。）

剛田 「やれやれ、ゴージャスの道も一筋縄ではいかなな…。明日の朝こそ、ゴージャスな一日を…。」

(スポットライトがムーンストーン製の泡だて器を再び照らし、剛田の「うん、ゴージャス！」という声が響き渡る。)

(幕。)

尺割

1. 第一幕：剛田質店の朝(10分)

- シーン1：剛田と白金の日常のやり取り(5分)
- 客が来店し、ムーンストーン製の泡だて器を持ち込む(5分)

2. 第二幕：鑑定開始(30分)

- シーン2：剛田が泡だて器を鑑定し、価値を熱弁(15分)

- ・ ムーンストーンの石言葉や
美しさを力説

- ・ 白金とのコミカルな掛け合い

- シーン 3: 実際に泡だて器を使っ
てクリーム作り(15分)

- ・ 実験的にクリームを作る様

子と剛田の優雅な動作を

描写

- ・ 完成したクリームを食べ、

驚くりアクション

3. 第三幕: 結果発表とエピローグ(40分)

- シーン 4: 買取価格の発表(10
分)

- ・ 剛田が慎重に計算し、驚き
の価格を提示

- ・ 持ち主の感動、白金の困惑

- シーン 5: 深夜の泡だて器事件

(エピローグ)(10分)

- ・ 剛田が再び泡だて器を使っ
てクリーム作り

▪ 白金に怒られるが、最後まで

で剛田のゴージャス精神は

変わらない

○ 幕引き…ムーンストーンの輝きを舞台全

体で見せ、剛田の名言で締めくくる(5)

分